

被爆者表象の遠近法

『日常生活の冒険』論

山本 昭宏

はじめに

「日常生活の冒険」は『文学界』一九六三年二月号から一九六四年二月号まで、一年間にわたって連載された長編小説であり、「齋木犀吉」という破天荒な人物の短い人生を、友人の小説家である「ぼく」が回想して記述するというスタイルをとっている。

この小説は大江の長編小説の中でもとりわけ先行論が少ない。その一つに、『大江健三郎全作品5』（新潮社、一九六七年）の付録に掲載された平野謙による「解説」がある。そのなかで平野は「日常生活の冒険」が持つ私小説的側面を指摘している。平野は岩野泡鳴と近松秋江との比較から、著者である大江が「私小説的リアリティによく対抗し得る主人公をいかにして設定すべきか」という私小説の困難に直面したと推測した上で、ストーリーテラーである「ぼく」に大江の分身をみている。

私小説的設定の論拠として平野が挙げているのは、「ぼく」の中国旅行、ソヴィエト旅行であり、それぞれ作者である大江の中国訪問（一九六〇年五月）とソヴィエトヨーロッパ旅行（一九六一

年八月）と対応しているわけだが、大江の実体験が関与していると考えられるのは「ぼく」だけではない。他の登場人物もまたそれぞれモデルと考えられる人物を持つている。一例をあげるならば「齋木犀吉」は伊丹十三を、「犀吉」のバトロンである「鷹子」は当時伊丹の妻であり、東和映画の川喜多長政の娘であった川喜多和子を彷彿とさせる。もともと、このように単純なモデル採しに意味はない。しかし、「日常生活の冒険」には、他の大江作品と比べてみても、作家自身の経験が色濃く反映されているという平野の指摘は、この小説の読解に際して当時の大江の活動に関する分析が必要であることを示唆している。とはいっても、「日常生活の冒険」における被爆者表象の問題を考察する本稿にとつて、その問題には全く触れていない平野の「解説」には不満が残る。

管見では被爆者表象に関連させて「日常生活の冒険」を論じた先行研究にあたるできなかった。唯一、成田龍一「方法としての記憶」（『文学』第六巻・第二号）があるのみである。成田は「暁」の存在を指摘しているが、「暁」の母親（彼女もまた被爆者である）に関しては言及すらされない。そもそも、「方法としての記憶」はいわば「万延元年のフットボール」に関する考察であり、それ以外の小説作品に関してはどれも紹介に留まっている。

本稿では、「日常生活の冒険」における被爆者表象を、一九六〇年代前半の社会状況に留意しつつ分析し、そこに込められた作家の意図を解明するとともに、この小説が現代に投げかけていると考えられる問題を提示したい。

1、「暁」の遠く

被爆した青年「暁」が「日常生活の冒険」に登場するのは、連載第九回『文学界』一九六三年一〇月号）である。

まずはこの発表時期に注目したい。これは、ルポルタージュ「広島 一九六三年夏」（『世界』一九六三年一〇月号）が発表されたのと同時期であった。^①

ルポルタージュ「広島 一九六三年夏」の内容を簡単に紹介すると、第九回原水禁世界大会の準備会議が運営をめくって紛糾したことを伝えつつ、大江自身が「広島のな人々」と向き合う過程の報告である。

僕は昨夜の開会式以後ひとつの欠落感を抱いている。僕はもうすべての会議にたいして見知らぬ他人のようにしかはいつてゆけない。そこで僕はぐるぐる走りまわっているだけだ。それは翌日の閉会式までつづく。^②

このように政治的言辭への違和感が表明されたのと同時期に、「暁」という被爆者が唐突ともいえるかたちで登場するのは、偶然ではあり得ない。大江と広島との関わりが深まっていく、その端緒において「暁」は造形されたのである。

では、「暁」はどのように書かれているのか。以下、登場の場面から小説の進行に沿って確認し、適宜分析を加えていく。

「犀吉」は友人ボクサーが出場するタイトルマッチの試合中継を聴くため、自宅に巨大な受信機を設置しようとしていた。受信

機設置のために技師が一人雇われ、付き添いでやってきた運転手兼荷おろし人夫が「暁」である。「おかしな話だがいま、僕の記憶では暁というのが、かれの姓であったか名であったかあいまいだ。ともかくぼくらはかれを暁と呼び、その文字と音の印象はかれを表現する記号としてかれによく似合った」（二二八頁）以下、「日常生活の冒険」からの引用は『大江健三郎全作品5』を引用元とし、括弧内に頁数だけを記す）とあるように、「暁」はそれが姓なのか名なのかは最後まで曖昧なままだ。^③

「暁」が被爆していたことが読者に明示されるのは、登場の直後、二日間働くと三日目を休む「暁」を不審に思った「鷹子」がそのことを技師に訊くと、「暁は、広島で原爆をうけたから白血病がふえるのを惧れているんですよ」（二二八頁）と返ってくる場面である。

興味深いのは、「暁」が被爆者であるという情報は彼自身の口からではなく、技師を通して明らかにすることだ。それだけではない。この小説を通して、「暁」は自らの過去を一度も口にしないし、「ぼく」がそれを訊くこともない。「暁」の語りとして鍵括弧が付されているのは小説を通してわずかに六箇所。このことから、無口な青年という「暁」の書かれ方が作者によって堅持されているのがわかる。読者が「暁」の過去や症状について知ることが出来るのは、他の登場人物の観察や伝聞によつてのみである。また、そもそもこの小説は「ぼく」による一人称の語りを採用しているため、「暁」の内面が描かれることはない。すなわち、「暁」は読者にとつて遠い。

「暁」の病状は、例えば次のように「犀吉」による語りを經由して読者に届けられる。

やはり暁は白血病なんだよ、かれの白血球は凄じいかぎりの数だった。それがいま降下しはじめ、まったく少なくなり、回復の兆しがあらわれているように見える。しかしこれはまた必ずぶりがえすんだ。再び白血球の数が上昇し、倦怠感が耐えがなくなり、ありとある関節が痛みはじめ、そして避けがたい死だ。いま白血球が減っているのは、みせかけ、あるいは欺瞞のさ。白血球が最後の一撃をくりだすまえに、人間どもをちよつと嘲弄するわけだ。ひどい話じゃないか。暁はそれらすべてを知っている。(三六七頁)

ここでスピヴァクの議論を援用することは容易だろう。小説世界において「暁」と、本稿の最後で触れることになる「暁」の母親は、自らを語るこの可能性から追放されている他者であり、「ぼく」や「犀吉」がその二人についてどれだけ言葉を費やそうと、それらはもっぱら抑圧として機能する。事実、「犀吉」の振る舞いは暴君のものである。それを書いているこの小説は、戦後の日本社会における非被爆者と被爆者の権力関係の一端を照らしているというわけだ。

あるいは、リフトンのいう「精神的麻痺」を当てはめることも可能かもしれない。約七十名の被爆者に対するインタビューと文献調査から、リフトンは、被爆者の「語りたくない」「原爆のことは自分とは関係がない」という語りを、「自己防御」でありながら「象徴的な死」でもある「精神的麻痺」だと指摘していた。⁴⁾しかし、文学者とは、言葉が担う社会的政治的意味を熟知しな

がら、あえてその言葉による実践の場において現実世界と関わる者の謂である。だとするならば、批評理論や精神分析の成果を援用して被爆者表象の問題をクリアにすることよりも、大江の試みを小説言語に沿うかたちで顕在化することが求められるのではないか。大江は「暁」を遠くに置くと同時に、想像力で接近を図った。次節では、その接近の内幕を、「暁」の数少ない発言を検討することで明らかにしたい。

2、原爆裁判のプラン

受信機が完成した後、肉体労働をやめた「暁」は「犀吉」に引き取られ、受信機を発信機に改造する作業を続けてきた。しかし、「犀吉」のヨーロッパ旅行に同行することになり、その作業は中断する。「暁」の旅券申請のカードに書きこまれた渡航目的は、ヨーロッパの白血病の専門医に診察してもらおうこと。とはいえずこれは名目だけのことであり、白血球が増加すれば広島原爆病院に戻る手はずになっていた。

「暁」と「犀吉」が旅立って半年後、結婚後の生活に不満を感じていた「ぼく」は、生活の刷新を期して旅に出る。その旅の途中でロンドンの「暁」と「犀吉」を訪問すると、「暁」の状態は悪化しており、治療のために日本に戻ることが決まっていた。

そして、ロンドン滞在中のある夜、「暁」は「犀吉」の受信機を発振機に改造しようとした理由を口にする。その言葉は、小説内で「暁」の語りとして鍵括弧つきで提示される言葉の中で、最長のものである。

原爆に直接責任のあるアメリカ人をひとりつかまえてきて、あのアパートの部屋で裁判しようと思つていたんです。裁判は全部、発信装置で東京じゆうに放送するんですよ。原爆を広島におとしたことについてトルーマン以下の責任あるアメリカ人を法廷によびだしたことはないでしょう？ それをやるのかなあ、と思つていたんですよ。(三四二頁)

この場面において、初めて「暁」は自らの感情を口にする。これまで遠ざけられてきた彼の内面が、原爆投下に責任のあるアメリカ人を裁くという計画とともに吐露されるのである。

被爆者がアメリカ人を裁くというアイデアを大江が披露したのは、「日常生活の冒険」が初めてではない。一九六一年八月六日号の『毎日グラフ』に掲載された広島長崎の被爆者とのインタビュー記事の中で、大江は以下のように述べていた。

大江 いまアイヒマン裁判があつてユダヤ人が裁いているけど、どうして日本人は原爆落としたトルーマンを裁かないのか、という声があつて出たそうです。みなさんはトルーマンでもいい、原爆の責任者を裁きたい、とはお思ひになりませんか。

川平 そういうことは考えないですね

岩永 まあ、考えれば、やつた方がいいんじゃないかと思う、罰は別としてねえ、被爆者の気持として、ハッキリしたあれをね、返事を！⁽⁵⁾

しかし、「暁」の原爆裁判の計画を、単にこの『毎日グラフ』の記事のみに帰することはできない。この小説の発表時期に起こつたある出来事に留意すれば、これが単なる大江の思い付きにとどまるものではないことは明らかである。ある出来事とは、一九六三年十二月七日に、いわゆる「原爆訴訟」(「原爆裁判」と呼ばれることもある)の判決が下されたことを指す。

一九五五年四月二五日、五人の被爆者が国を相手に、原爆投下の国際法違反認定と、原爆被害の損害賠償を求めて訴訟を起こしていた。判決のなかで東京地裁は「原子爆弾の投下は無防備都市にたいする無差別爆撃で、国際法上違法である。しかし、損害賠償請求権は国際法上も国内法上も個人にない」として、世界で初めて原爆投下の国際法違反が認められたものの、損害賠償請求は棄却した⁽⁶⁾。訴訟提起からの一連の流れは全国紙でも大きく報じられ、被爆者に対する救護を求める輿論を喚起したと言われている。

「暁」のどこか投げやりな原爆裁判の計画は、国際法違反が認定されたところで(もちろんそれが認められたこと自体には大きな意味があるのだが)生活は何も変わらず、アメリカからの「返事」もないという現実を鋭く射抜いたものであつた。話を小説に戻そう。原爆裁判の計画は実現されることがなかったが、「犀吉」と「暁」はそれを演劇として、舞台上で行おうとする。

あれは結局、暁自身認めるとおり壮絶ではあるが無意味でセンチメンタルな妄想にすぎなかつたろう。そこで、おれと暁

とはそれを演劇の世界で具体的にやってみることができると考え始めたのさ。任意のひとりのアメリカ人に俳優としての給料をはらい、そいつにトルーマンとか原爆の発明者とか、あれをつんできた飛行機の搭乗員とかの役割をやらせるのさ。いや、むしろそいつには単なる任意のひとりのアメリカ人の役割をやらせてもいいだろう。おれ風にいえばそいつがひとりのアメリカ人という役割について想像力をめぐらすとき、そいつのそれまでの生涯の観察をつうじて、かれの背後のすべてのアメリカ人が、舞台にあらわれるわけだ。そして原告側の証人には暁とかれの友人たちが広島からやってきて出演するだろう。(三五四頁)

この計画において、原告側には「暁とかれの友人たち」を設定し、被告側に「任意のひとりのアメリカ人」を配しているのは、単にアメリカ人俳優を複数揃えるのが現実的に難しいという理由からではない。引用部にもあるように、彼らが求めているのは職業俳優ではなく、匿名のひとりのアメリカ人である。ひとりのアメリカ人を舞台上上げることで、彼らはアメリカそのものを呼び寄せようとする。しかし、「暁」の状態悪化のため、この演劇の計画もまた実現されることはない。

3、「暁」の死と母親の復讐

「暁」がどこまでも無口な青年として書かれ、病状や被爆の過去さえも他の登場人物を経由して小説上に表れること、そして、

そのように設定した「暁」に接近しようとする大江の試みは、既にみた通りである。

しかしながら、「暁」の最期は、その距離を再び、今度は極大に遠ざけるかたちで訪れる。

ぼくは新聞を読み、妻を脅かした事件を知り自分もまた深く怯えた。麹町のある舗道に面したひとつの坂になった小路から、手押し車に乗った青年が降りてくるところをジャガーEタイプに載った外国婦人づけのもうひとりの青年が轢き殺してしまったという記事。(三七〇頁)

「暁」は、「犀吉」が運転するジャガーEタイプに轢かれて死に、「ぼく」はそれを新聞の死亡記事を通して知る。小説内ではその死亡記事の内容が引用部のように「ぼく」によって紹介されるのみであり、詳しい内容までは明らかではないが、あくまで不幸な事故として「暁」の死を伝えていたようである。つまり、そこには「暁」が被爆者であり、白血球の増加によって車椅子での生活を余儀なくされていたということは報道されていない(かりに報道されていたとしても、「ぼく」はそれを語らない)。

回復不可能な「暁」を「犀吉」はいわば自殺幫助のような形で殺したのだろうか？ その問いを避け、「ぼく」は「暁」の死を意識の外に閉め出そうとする。「暁」の死が「犀吉」の殺意の問題に転化され、「ぼく」は暁の事件からすつかり尾をまいて逃げだしていたのだ。(三七三頁)というわけである。ここでは、被爆の事実を後景に退ける方向に、小説のメカニズムが作用している

と言つてよい。

だからといって、被爆者表象が宙吊りのまま途切れるわけではない。大江は「暁」の死の後にも、被爆者を登場させている。

それが「暁」の母である。彼女は「暁」の親戚のなかで唯一の生存者であり、「広島周辺の旧軍港都市」で「失対人夫」をしていた。

彼女は太く硬くなつた指を見せてくれて、自分は原爆症の徴候さえあらわれなければいつまでも働けると誇らしげにいった。そして市が赤字財政を転換するために失対費を削減するといふ噂だけを気にかけていた。もつとも彼女の腿にはすでに葡萄のひと房みたいな出血斑ができていたのである。彼女はそれがいつのまにかコンクリートの破片にでもぶつかつてできた傷あとであることをねがっていた。(三一九―三二〇頁)

このように描写される気のいい彼女は「暁」の死を知ると、復讐するために上京し、「犀吉」を探しまわる。

呉の町でニコヨンをやつていた暁の母親が東京にでてきたんだ、そしてナイフをもつてうろついているというんだよ。麴町にも幾度かきたそうさ。その女怪物が報復のナイフをふるつておれにおそいかかつてきたなら、おれはまったく無抵抗に刺されるままになるだろうという気がするね。そういうこともあつてヨーロッパに逃げだすわけだ。(三二七―一頁)

「犀吉」は「暁」の母の襲撃を回避し、首尾よくヨーロッパに渡る。しかし、息子を殺された被爆者は東京をさまよい続けるだろう。「暁」の母親の怨念めいた怒りは、「犀吉」と「ぼく」が「暁」を忘れ去るのを許さない。

「暁」死後の母親をめぐる挿話が示しているのは、たとえどれだけ努力して意識の外に追いやるうとしても、日本から脱出したとしても、当然ながら被爆の事実をなかつたことにはできないし、それと無関係であることも不可能であるという「正しい」認識だけではない。それよりもむしろ、なかつたことにしたい、遥か彼方に留めおいておきたいという非体験者内の記憶の力学と、それを許さずに近づいて来る―あるいは非体験者に接近を促す―体験者の存在との間に作用する緊張関係の例証が書きこまれているのである。

後に大江は、『被爆者の同志』たることは、すでに任意の選択ではない。われわれには『被爆者の同志』であるよりほかに、正気の間人としての生き様がない(『ヒロシマ・ノート』岩波書店、一九六五年 一八五頁)という名高い断言を行う。しかし、『被爆者の同志』になることを迫るかのような言辞を振りかざすことは、別種の政治でしかない。それ以前に書かれた「日常生活の冒険」における被爆者表象の遠近法が現在の我々に問うているのは、日々の生活の中で特定の「正しさ」に回収されることなく、みずから内部を問い直す試みはいかにして可能なのか、という問題なのではないだろうか。

注

- 1 「広島 一九六三年夏」は、『ヒロシマ・ノート』に編入される際に「広島への最初の旅」と改題されている。
- 2 「広島 一九六三年夏」「世界」一九六三年一〇月号 一三四頁。なお、この部分は『ヒロシマ・ノート』所収の「広島への最初の旅」で次のように改稿されている。「僕はこれらの政治的な会議において自分を、たまたままぎれこんだ見知らぬ他人の旅行者のように感じる。そこで会議場でのぼくはぐるぐる走りまわっているだけだ。しかし、いったん会議場の外に出ると、僕はすぐさま、僕にとつてもっとも新しい真の広島にめぐりあうのである。僕はそれにむかつてはいりこみ、もっと深くもっと親密になろうとする。」
- 3 「暁」という名前は、W・L・ローレンスによる著作『0の暁』（創元社、一九五〇年）を思わせるところがある。『0の暁』は、マン

ハッタン計画の開始から長崎原爆の投下までを書いたノンフィクション作品であり、翻訳当初から広く読まれ、『世界ノンフィクション全集 第12』（筑摩書房、一九六一年）にも収録された。なお『0の暁』の中で、「0」は原爆実験の爆心地を、「暁」は実験時の光景と新たな新時代の到来を意味している。

- 4 榊井迪夫他訳 ロバート・J・リフトン『ヒロシマを生き抜く（上）』岩波書店、二〇〇九年、五一―五五頁
- 5 「絶望した者も絶望しなかった者も：」『毎日グラフ』一九六一年八月六日号 三九頁
- 6 『ヒロシマの記録 年表・資料編』（未来社、一九六六年 一七五頁）と『朝日新聞』一九六三年十二月七日付夕刊より。

付記

本稿は第三三回原爆文学研究会・二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会（二〇一〇年一〇月二・三日、於広島大学東広島キャンパス）で行った口頭発表の一部に、加筆・修正を施したものである。質疑応答の際、あるいは懇親会の席上で、様々な示唆を与えて下さった皆様に、記して感謝申し上げます。